

宮本百合子治安維持法裁判資料 『治安維持法違反(一)宮本ユリ』を翻刻!!
伝記・作品研究、プロレタリア文学研究、治安維持法研究に必携!!

渥美孝子 翻刻・解説

宮本百合子裁判資料

— 「手記」と 「聴取書」 —

鳴り響るいておそ
れを深く感動す
せたものでございませう
こころ激しい
け代に人のこころ
にみる優しきもの
胸のききもの
つみなきき書 玉柄は
せん。

しめホに、けい
まのそとせう
精神を奮い
おこし
それのり越え
つても
涙なきを思いま

推薦 荻野富士夫 (小樽商科大名誉教授)

中川 成美 (立命館大学特任教授)

●四六判・上製・520頁

●本体価格6,000円+税

ISBN978-4-8350-8429-9

不二出版

刊行の意義

宮本百合子の治安維持法裁判の弁護資料として鈴木義男弁護士によって裁判資料中から謄写されて残された『治安維持法違反(一)宮本ユリ』を翻刻。率直に綴られた「手記」などからは百合子の作家としての覚悟が窺える。また、特高によって検挙された被疑者の司法処分に関わる聴取書などの残存はごく稀なため、本資料は治安維持法裁判の司法「処理」の過程を具体的に示すものとして価値が高い。百合子研究、プロレタリア文学研究には必携資料であるほか、治安維持法研究にも大きく貢献しよう。

推薦します

治安維持法裁判の司法「処理」の過程を具体的に示す

荻野富士夫(小樽商科大学名誉教授)

特高警察による社会運動や戦時下の民心の動向などの報告類はかなり残されているが、検挙した被疑者の司法処分にかかわる聴取書などは、ごくわずかしが残されていない。おそらく大部分は敗戦後の責任回避のために焼却処分されてしまった。

本資料『治安維持法違反(一)宮本ユリ』は、宮本百合子の治安維持法裁判の弁護資料として、鈴木義男弁護士によって裁判所の裁判資料中から謄写されて残されたものである。主に警察における取調・聴取関連の文書で構成されており、治安維持法裁判の司法「処理」の過程を具体的に示すものとして、本資料の価値は高い。なお、思想検事や予審判事による各「訊問調書」や証人調などを収録する『治安維持法違反(二)』以降も存在したはずである。

百合子は「手記」において、「将来共産主義宣揚となる文章活動を行う意思を持っていない」こと、および「贖情の意を表す」ことを理由の一つとして「今後一年間創作評論等の発表を見合わせる決心」を表明せざるをえなかったが、「今後の方針」として「広い意味でのプロレタリア作家としてリアルズムの方法論の上に立ち、合法的な文筆活動によって、この社会生活の悲喜交錯した人間の姿を歴史的動向との関係に於て芸術化して行きたい」と意欲を示した。そのため、特高の検事局への送致書の「備考」では「自発的清算ノ意思無キコト、転向セザル」とみなされた。また、三一年一〇月に共産党に入党していたことの「実証」をつかまなかったことも、百合子と特高警察の聴取における静かで熱い攻防をかいま見せてくれよう。

「手記」や聴取書は比較的率直に書かれていると思われる、百合子の文学観なども検討に値しよう。私には、小林多喜二虐殺の事実が作家同盟員に「異常ナル刺戟」を与え、「昨春秋以来動揺シテ居タ同盟員ノ頭ニ今ヤ新シイ恐怖ガ植ヘ附ケラレ」、「一層引込思案ニ為ツテ」しまったという、第四回聴取書でなされた見方が興味深かった。

苦痛の中にあつて些か幸福

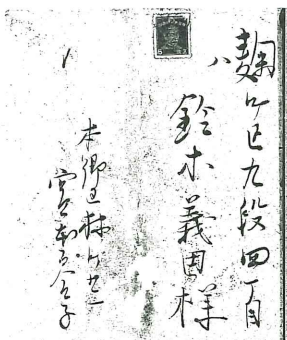
中川 成美(立命館大学特任教授)

治安維持法が政治運動や社会運動に与えた弾圧は、戦間期の日本の思想と文化、文学に甚大な影響を与えた。国民国家というシステムが偏向の意思をもって突き進むとき、国家は国民に意識、身体の両面にわたって抑圧を加えていく。現在にあつても、世界中でその事例の枚挙は遑なく、様々な酷薄な法が跋扈している。

本書は、一九三五年の宮本百合子の治安

維持法違反裁判資料の翻刻である。この驚くべき資料を、渥美孝子氏が綿密に翻刻、また懇切な解説を付した。本書が、これまでの宮本百合子研究を促進する資料集であることは間違いない。百合子の伝記的な空白を埋めるとともに、百合子の自伝的作品と相補的な関係結びながら、百合子の新しい小説を読むような感覚に襲われる。何より、本書からは、逮捕、拘留という困難の時に百合子がどのように思惟し、煩悶し、なお希望を繋ごうとしたかが伝わってくる。取り調べに先立って二度にわたって提出された自らの来歴を記した「手記」で百合子は、「自己批判」という箇所、「この二三年来の急激な境遇の変化、錯雑な苦痛」を訴え、そのうえでそれを作家として引き受けよう」と結んでいる。「苦痛の中にあつて些か幸福」という結句こそは、百合子の気概と抵抗の宣言とみなせよう。

本書が、百合子研究のみならず、プロレタリア文学運動史を研究するうえで重要であることは言うまでもないが、何より、文学と思想の相克をどのように考えていくかという、まさしく現代的な問題に触れていることを付して、推薦の言葉としたい。



→百合子から鈴木義男夫妻への封書宛名。
表紙左上…百合子から鈴木夫妻への手紙
表紙右下…百合子写真(出典『宮本百合子全集』第二〇巻、新日本出版社、一九七九・一〇、口絵より)

翻刻・解説者略歴

渥美 孝子(あつみ たかこ)

上智大学大学院博士後期課程満期退学、東北学院大学名誉教授。主要論文に、「川端康成『水晶幻想』論」(東北学院大学論集一九八八・三)、「植民地の子供」ということ——清岡卓行と原口統三の〈大連〉(昭和文学研究一九九七・二)、「皮膚と心」論(『太宰治研究』一九九八・六)、「島崎藤村と東北学院」(島崎藤村と東北学院)実施委員会二〇〇二・一〇)、「高架線」から『機械』へ——昭和五年の横光利一(『横光利一研究』二〇〇六・三)、「小林多喜二」と伊藤整——「生きる怖れ」をめぐる問題(『国文学』二〇〇六・九)、「村上春樹『アフターダーク』の居場所——アダルト・ナルドレンと監視社会と」(『社会文学』二〇〇八・七)、「東北文学」に集った人々(一)(二)(『東北学院資料室』二〇一〇・四、二〇一二・四)、「漱石『草枕』——絵画小説という試み」(『国語と国文学』二〇一三・一一)などがある。

関連図書のご案内

『貴司山治全日記』

一九一九年〜一九七二

貴司山治研究会(代表・中川成美)編
DVD全四枚十別冊『貴司山治研究』一冊
本体価格二八七、〇〇円十税

プロレタリア文学再考の
新基軸!

貴司山治全日記
一九一九年〜一九七二

DVD版

不二出版